

# 堀川をめぐる人びと

堀川開削410年をふりかえる

いつも心に川がある  
堀川まちづくりの会企画展

## 文藝・歌舞伎・翻訳に腕揮う稀代の文人 坪内逍遙

### 活躍の源泉 名古屋の寺子屋時代

#### 少年期の名古屋で才能育む

坪内逍遙(本名雄蔵)は安政6年(1859)に尾張藩美濃太田代官所で手代の子に生まれ、明治2年(1869)上笹島村(広井村)に移り新道町の寺子屋に通う。母とよく歌舞伎を観劇、貸本屋大惣にも足繁く通い江戸の草双紙や稗史、とりわけ曲亭馬琴に親しんだ。愛知英語学校(愛知一中の前身)卒業後、明治9年県の選抜生として東京開成学校へ入学、東京帝大文学部を明治16年に卒業。東京専門学校(現早稲田大学)の講師となり、その後の活躍へと繋がっていく。

#### 堀川に遊んだ思い出

『私の寺子屋時代』(1920)に、「水とっては、海こそは約一里の南に伊勢海へつづく尾張湾を控えていたが、河は堀河の名にし負う人工のものがたった一流れあるばかり。けれども名古屋としては、それが其街を貫いて流れる最大の水であったので、其やや河下の両岸に植付けられて年を経た桜の老木は中々見事で、堀河の花見といふと江戸の向島のそれ扱い、私が十一、二から十四、五頃までは、折々父母と共に屋形船などに乗って、見に行ったのを思ひ出す。又沙魚釣りが父の年中行事の一つであったので、年に少なくとも二度以上、同じく其河を——家族一同が暗いうちから家を出て、多勢の時は、近親、縁者、出入の者を併せて、二艘仕立で、昼夜の支度をして——船で下ったのを思ひ出す」と書いている。

大学の演劇仲間、市島春城(早大初代図書館長)、岡山兼吉(弁護士・衆院議員)との「三友会」を得月楼(歴史家・儒者の頼山陽が命名。後に鳥久)でよく催し、その思い出を市島が「得月楼の追憶」(1941)という随筆に残している。そこには、初めて得月楼を訪れた印象を「街中にあるのに、得月楼とは、どういうことかと店名の由来に興味を持った。二階に上がり、川にもやっている船を眺める。川の上には満月が出ていた。この夕べは、あたかも月夜で、月の光は水に映じてキラキラしてえもいわれぬ風情があるので、私は覚えず手を打って得月の二字虚しからずと初めて楼名の謎を解いた」と感動をこめて記してある。



上:早稲田大学演劇博物館前の逍遙銅像  
下:同館の外観(写真提供:早稲田大学演劇博物館)

### 歌舞伎・文藝協会・シェークスピア翻訳 大惣は心の故郷

明治5年愛知洋学校(後に愛知英語学校)に入学、『学生時代の追憶』の中で「彼れ(教師マックレラン)が『ハムレット』のセリフを立て、身振まじりで、ポケットのナイフを逆手に持って“ツービー・オア・ナット・ツー・ビー”などと表情までして朗読してくれたのは、不思議に今もなお耳に残っている」と記しており、シェークスピア翻訳に生涯をかける端緒となる。1909～28年にシェークスピアの全作品(全40冊)の翻訳を成し遂げ、偉業を記念して早稲田大学に坪内博士記念演劇博物館が創設された。晩年は熱海の大柿舎で訳文改訂に取り組み、『新修シェークスピア全集』刊行とほぼ同時の昭和10年(1935)大柿舎にて没する。

代表作として、評論『小説神髓』小説『当世書生気質』戯曲『役の行者』と挿絵も自身の手による絵巻物『神変大菩薩伝』、さらに翻訳『シェークスピア全集』などが挙げられる。逍遙は『少年時に見た歌舞伎の追憶』の「貸本屋大惣」に書いている。「大惣は、先方は無表識であり不言不説であったのだが、私に取っては、多少お師匠様格の働きをしていたとってよい。とにかく、私の甚だ粗末な文学的素養は、あの店の雑著から得たのであって、誰れに教わったのでもなく、指導されたのでもないのだから、大惣は私の芸術的心作用の唯一の本地即ち“心の故郷”であったといえる」



大惣貸本店図 山田秋衛画(鶴舞中央図書館蔵)

小説家としての彼の素養は、貸本屋の大惣から借りた、草双紙や戯作をむさぼり読んだことによって培われた。英文学者としての素養は愛知英語学校、劇作家としての素養は、母親に連れられてどっぷり漬かった歌舞伎と大惣の浮世絵などから養われたとってよいだろう。

演劇の近代化に果たした役割も大きい。明治39年(1906)島村抱月らと文藝協会を開設し、新劇運動の先駆けとなった。雑誌『早稲田文学』の成立にも貢献した。

大惣が後継者難で店を閉じる際には相談を受け、一部は引き取るが、地元本は蓬左文庫へ、他は吉川弘文館が買い取り市中に流れ、国会図書館、東京、京都、筑波、早稲田の各大学図書館、東洋文庫に約2万7千冊が現存する。その中には木版墨刷画に逍遙が彩色した稀観本も含まれていた。



大柿舎にて(大正10年)  
『逍遙選集』より